連載：現代管情報シリーズ

ロシア製

新型GZ34系３種

都来往人

先月号のお詫び

先月号でロシア製のTung-Sol KT150をご紹介した際に，肝心の規格表（第5-1・2）が，本来は発売元が作成したオリジナルを掲載すべきところを，誤って米国の販売店（Parts Connection）が独自にアレンジしたものを掲載してしまいました．

現在，Web上では2種類のKT150の規格表が公開されています．一方は発売元のNew Sensor社が作成したオリジナルです．他方はParts Connectionのように，オリジナルを大胆にアレンジしたタイプですが，オリジナル以外は動作曲線が単なる背景の一部としてパッチ・ワーク的に使われているため，グラフとしては役に立ちません．それに加えて，販売店のWebサイトの透かしが入った見苦しいものになってしまったことをお詫びいたします．ここにあらためてオリジナル規格表を掲載します（**第1表**参照）．

はじめに

米国のNew Sensor社は，ロシアのReflector工場で新たに開発されたGZ34系を2013年10月に発売しました．今回デビューしたのはTung-Sol 5AR4とMullard-GZ34，Genalex-U77の３種類．ロシア製の整流管としては久々の新製品です．

余談になりますが，2013年11月号でロシア製Genalex-CV511（=6V6GT相当管）をご紹介した際に，次に同じGenalex Gold-Lionブランドから新型管が登場するとしたら整流管のU77（Mullard製GZ34のOEM品）ではないかと予測しましたが，図らずもこの読みは的中しました．

ところで，ロシア製のGZ34系としては，13年前から製造しているSovtek-5AR4がありますが，これと新製品との違いが気になります．

発売元や米国の販売店のホームページに掲載された写真を見ただけでは，三種三様でありながら中身は同じようでもあり，違いがよくわかりません．しかもテスト・レポートはおろかつい最近まで国内での取り扱いもなかったため，詳細は不明です．

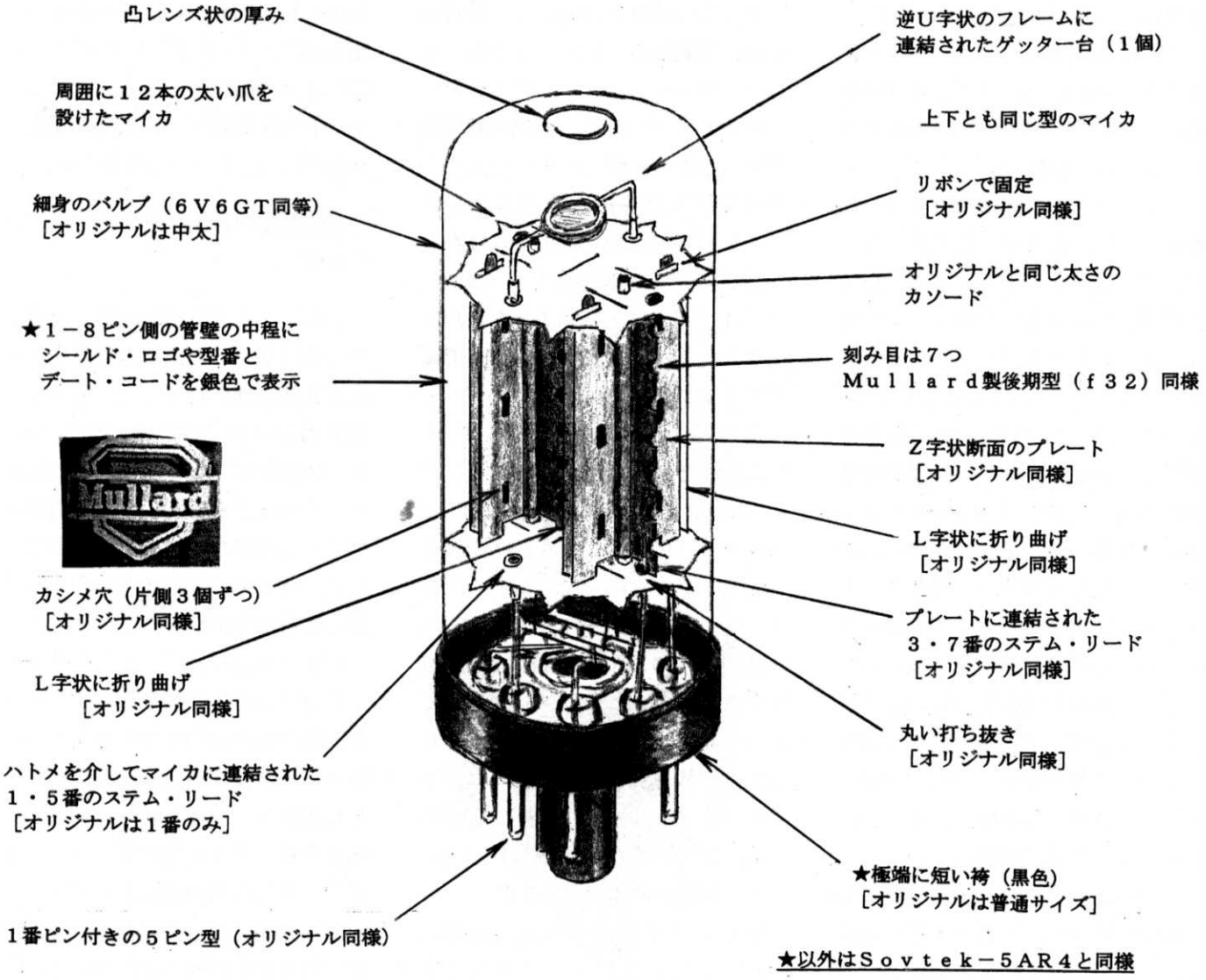
先頃，これら新型GZ34系３種類のサンプルを入手しましたので，今回はいち早くその特徴を探ってゆきたいと思います．

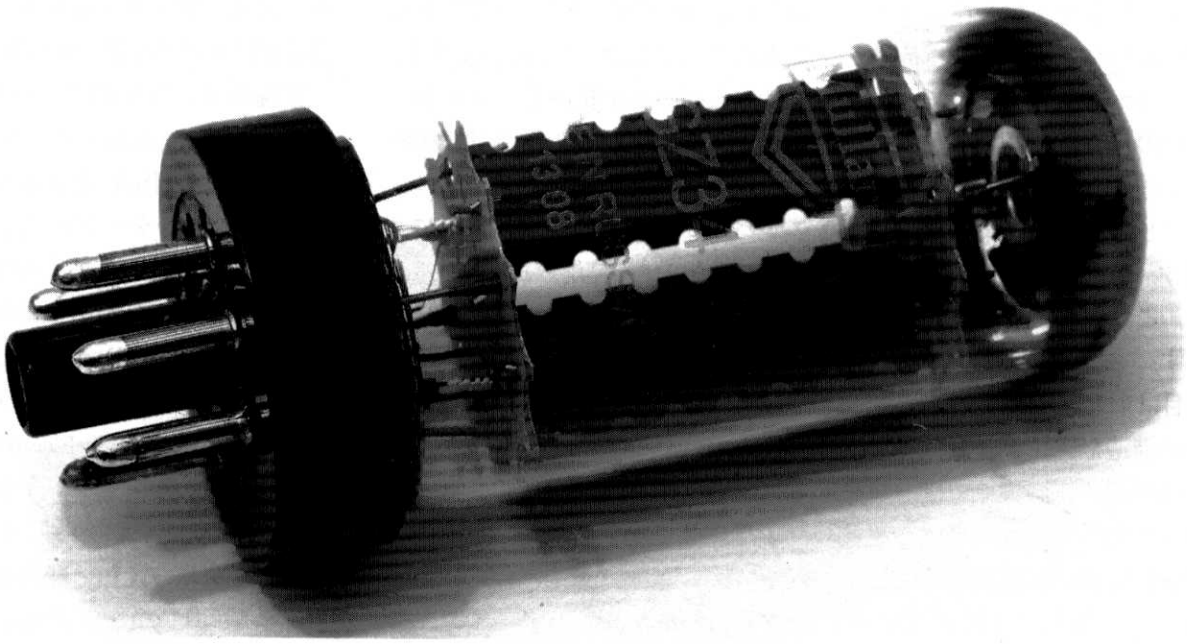
GZ34／5AR4について

GZ34が所属するGZ30番台の球は皆，インターナショナル・オクタル・ベース（米国式オクタル・ベース）を履いたEf=5Vの傍熱型全波整流管です．Gはヒータ電圧5V，Zは整流管，3はインターナショナル・オクタル・ベース，末尾は開発登録順を意味しています．シリーズにはGZ30，GZ32，GZ33，GZ34，GZ37があり，開発したのはいずれもPhilips系のメーカーです．

最初に登場したGZ30は，6V6GTや5Y3GTと同寸法・同形状の小型GT管です．ヒータ定格は5V／2A，尖頭耐逆電圧1.4kV，最大交流入力電圧500V，尖頭プレート電流375mA，最大直流出力電流は125mAで，入力コンデンサは最大50μFです．最大直流出力電流はRCA-5Z4と同等ですが，最大交流入力電圧は100V以上も高くなっており，かつ入力コンデンサの最大値も10μF多く許容していることから，技術的に進んだ球と言えます．

なお，メタル管時代のRCA-5Z4は，最大交流入力電圧400V，尖頭耐逆電圧1.1kVでしたが，GT管時代と思われる1938年版の規格表では，最大交流入力電圧AC350V，





◆ Mullard-GZ34 復刻版の構造的特徴

34系において，TS-5AR4，U77-RI，M-GZ34RIの個別の規格表は残念ながら確認できません．唯一確認できたのは3モデルの原型であるSovtek-5AR4の規格表（**第2表**参照）です．

ヒータ定格は5V／1.9A，最大交流入力電圧550V，尖頭耐逆電圧1.5kV，尖頭プレート電流750mA，最大直流出力電流250mA，入力コンデンサ容量は最大60μFで，交流入力電圧300Vから550Vまでの各段階の代表動作例も含めてヴィンテージのGZ34（**第3表**参照）のスペックと同等です．規格表の上ではオリジナルを完璧に復刻しているように見えます．ところが，現物のバルブは細身のT-9型相当なのに規格表では中太なT-11型と表示されており，不思議です．

そんな細かいことは別として，TS-5AR4，U77-RI，M-GZ34RIはSovtek-5AR4と構造的に同じことから，電気的特性も同等と見なすことができ，ヴィンテージの代替品として十分使えると思います．

★試聴結果

TS-5AR4，U77-RI，M-GZ34RIのいずれも内部構造はSovtek-5AR4と同じで個別の規格表が確認できないため，個々の違いは使ってみなければわかりません．

肝心の音質は，自作の6V6GTシングル・アンプ（ECC88-SRPP+6V6GT）のグリッド・バイアスを調整して確認することにしました．電圧増幅管はPhilips製のE183CC／7308に，出力管はGZ34と相性の良いEL34とし，定評のあるMullard製のxf2に決めました．スピーカーは三菱のP-610DBをバスレフ箱に入れたものです．

ロシア製のGZ34系は皆，プレートに7つの刻み目があるため，プレートの形状が同様なMullard製のf32をリファレンスとしました．

最初に試聴したMullard製（f32）は，明るく瑞々しくて，ワイド・レンジかつダイナミックですが，決して騒がしくない，落ち着いた音です．低域は豊かですが重すぎず，高域は素直に伸びていて，芯は中域にあり，バランスは極めて良好です．余計な付帯音は少ないのですが，響きや余韻は中庸で，ハーモニックがとても綺麗です．しっとり濡れたその音は肉感的でコクと色気があって，表現力や音楽性は極めて高く，熟成された味わいが十二分に感じられます．人気が高いのもよくわかります．

続いて試聴したSovtek-5AR4は，明るくて瑞々しく，ワイド・レンジかつダイナミックといった基本的な音の傾向はMullard製によく似ていますが，ややタイトで硬質的な印象です．バランスは悪くないのですが，ライブでダイレクトな表現の仕方で，響きや余韻が控えめなため，伸びやかさの点では物足りなさを感じました．それでも10分程経って十分にヒート・アップすると艶やかさが増し，のびやかになってきました．どちらかと言うとMullard製よりも芯はやや高域寄りで，軽く，硬質感もあってか，高音はシャープにくっきりと聴こえます．

これに対して，TS-5AR4ではがらりと印象が変わりました．Sovtek-5AR4よりも伸びやかで，肉感的でしっとりしてコクが増しており，硬さはほとんど感じられません．低域は豊かですが重すぎず，高域は素直に伸びていて，芯は中域にあり，バランスはぐっとよくなりました．響きや余韻は中庸で，余計な付帯音が少なく，落ち着いています．ハーモニックも綺麗で，表現力のレベルはSovtek-5AR4の数段上です．どちらかと言うと明るく開放的な米国風のサウンドです．

他方，U77-RIの基本的な音の傾向はTS-5AR4に良く似ていますが，低域は適度に締まってよく弾み，より肉感的でダイナミックです．TS-5AR4よりも表現力は高く，英国風のリッチなサウンドを楽しめました．

M-GZ34 RIはU77-RIよりも爽やかさが増しており，バランスは3種類の中で最も良いと思います．やや軽めですが，オリジナル：Mullar製に一番近い印象です．奇妙なルックスの球ですが，実力はあなどれません．個人的には3種の中でTS-5AR4のサウンドが一番気に入りました．

余談になりますが，海外ではヴィンテージのGZ34の中ではメタル・ベース型が音質的に最高の評価を受けています．あいにくPhilips製のメタル・ベース型を持ち合わせていないため，松下製を試聴したところ，全体的な音の傾向はMullard製によく似ていますが，さらに伸びやかです．例えて言うならば，WE-274Bのような心の琴線に触れるような感動がありました．音楽の情感にどっぷりと浸ることができて幸せなひと時を味わうことができました．

新型GZ34系3種の開発の意図は何か？

New Sensor社が展開するTung-Sol，Genalex，Mullardの各ブランドには出力管と電圧増幅管は複数品種あっても，整流管はラインナップされていませんでした．

New Sensor社が発売するロシア製の整流管は，Electro-HarmonixブランドのEU4GB-EHや6CA4-EHと，Sovtekブランドの5AR4

のベースを履き，Gold-Scriptが描かれていないため，これもまたヴィンテージ品の復刻品ではありません．英国風に仕立て直した新型管ですが，今の時代ではU77といってもピンと来ないユーザーが多いのか，GZ34の名前を添えた複番表示になっているようです．

Mullard-GZ34は，鋸歯状プレートだという点ではヴィンテージ品によく似ていますが，刻み目が7つでベースの袴が極端に短い球はヴィンテージ品には存在しません．刻み目が7つなのはベースの袴が通常サイズのf32の後期型もしくは末期型のf33しかありません．ロシア製のMullard-GZ34もヴィンテージ品の復刻版と言うには中途半端です．極端に袴の短いベースの採用は他のモデルとの差別化を図るためのようです．恐らくイメージをメタル・ベース型に似せたかったのでしょうが，ベースを新規開発するとコストが嵩むため，KT90-EHの部材を流用したようです．おかげでコイン・ベースを履いた末期の米国製小型GT管のようなルックスになってしまいましたが，これはこれで現代的で新鮮です．

球に触れて観察しただけでは3種とも中身は同じで，ベースとマーキングを変えただけのように見えること．かつ個別の規格表は確認できず，公表されているのはSovtek-5AR4の規格表だけのため，所詮はSovtek-5AR4と同じと思われるかもしれませんが，音質は微妙に異なり，いずれも原型であるSovtek-5AR4よりもグレードは数段上です．エージングなどのレシピによってスパイスを効かせているのではないかと思われます．

12月15日現在，国内では秋葉原のクラシックコンポーネンツでの取り扱いが確認できました．気になる価格はSovtek-5AR4が1,600円に対して，Tung-Sol 5AR4は4,000円，Mullard-GZ34は4,700円，Genalex-U77は4,900円です．いずれも原型のSovtek-5AR4に比べて割高ですが，音質的にはぐっと磨き上げられていることが確認できたため，試してみる価値はあると思います．

ヴィンテージのGZ34はすっかり枯渇して，現在では程度の良い中古球でも1万円近く，NOS球に至っては1万円以上の高値がついており，かつてのように消耗品的に使うことが難しくなっています．他方，現代版のGZ34系は，2003年以降はSovtek-5AR4，SG-5AR4，J／J-GZ34Sだけという状態が10年も続きました．そのように停滞していた現行のGZ34系においてキャラクターの異なるモデルが一挙に3つも登場したことは，バリエーションが増えてうれしいニュースです．

願わくば，バルブがヴィンテージのPhilips系製品のように一回り大きな中太型に変更されると，表面積の拡大によって冷却効果が高まり，寿命の点で有利になると思います．Reflector工場では，小型GT管は全て米国T-9型相当の細管に統一しているようですが，Mullard-EL34復刻版で採用した中太バルブを切り詰めて，マイカの口径を改めれば可能です．元々，原型（Sovtek-5AR4）の素性は悪くはなく，復刻完成度が高まるので，実行してくれることを期待しています．

★次号予告

現代版のオーディオ用直熱三極出力管は，チェコ製品や211，845，Fullmusic製の一部を除いては，300B系と2A3系に集約できます．これは300Bや2A3の需要が大きいためですが，真空管ファンの目から見れば単調で広がりに欠けます．ヴィンテージの直熱三極出力管の中には他にも名声を得た球が幾つもありますが，需要を考えると（RCA-250のレプリカであるSG-50のような例外もありますが）本格的な復刻版の開発までには至らなかったようです．

そのような状況の下，中国の恒揚電子が展開するPsvaneブランドからWE-275Aの復刻版が2013年にデビューしました．

どちらかと言うとマイナーな存在のWE-275Aの復刻版など考えられなかったため，意外な展開です．この情報をキャッチした当初は「300Bの設計を応用した2A3Bのようなモデルだろう」とたかをくくっていましたが，写真を見ると電極の形状からステム周りの部材の形状に至るまでオリジナルをかなり忠実に復刻しているようで，とたんに興味が湧きました．「現物に触れて詳細を確認したい」という思いは日増しに強くなるばかりで，とうとう思い切って1ペア購入した次第です．

次回は中国製のWE-275Aレプリカである Psvane-WE275の概要を，入手したサンプルの観察結果をもとにお伝えしたいと思います．